



社会はなぜ左と右にわかれるのか —対立を超えるための道徳心理学—

ジョナサン・ハイト著 高橋洋訳

紀伊國屋書店 2014

経済学部教授 吉江 文男

政治への興味の大小に関わらず、我々の政治的な信条あるいは心情はリベラルと保守に大きく分かれる。リベラルの最も重視する価値は抑圧の犠牲者に対するケアであり、保守のそれは道徳共同体を維持する制度や伝統の保護であるという。では、このような違いは何に基づいているのだろうか。著者によれば、この違いは論理的な思考の結果ではなく、道徳観の違いによって生じるのだという。つまり、人は道徳的直感を得た後でそれを正当化する政治理論を考えるということである。

では、その道徳的感情とはどのようなものなのか。著者は、道徳的感情は長い集団生活と集団間の争いの中で自然選択と集団選択によって獲得された人権や社会の結束などに関わる直感的な知恵であるとする。そして、著者が最も重要と考えるのはケア、公正、自由、忠誠、権威、神聖という言葉に象徴・統合される6つ道徳的感情（道徳基盤）である。道徳観の違いというのはこれらの道徳的感情のバランスの違いである。リベラルの主張はおもにケア、公正、自由という3つの基盤に依存するのに対し、保守は6つすべての基盤におよそ

均等に依存するという。結果として、我々は左派の個人志向性と右派の集団志向性を感じるようになる。両者の主張は対立するが、著者は多様な道徳基盤の意義を理解し、互いの道徳的価値観を尊重することが対立を和らげる一助になると考える。このような著者の仮説は脳や遺伝子の研究などによって検証可能なものと考えられる。

著者は6つの道徳基盤に基づいて主張する点で保守に説得力があると述べる。一方、道徳基盤のバランスの差は民主的な社会で最も尊重すべき基本的人権のウェイトが保守で相対的に低いことも示している。道徳的感情は教育や社会環境の影響を強く受ける。そして、例えば道徳教育が集団への忠誠や権威への敬意に偏れば権力の暴走に、神聖さ・純潔さに偏れば自民族中心主義につながる。また、社会不安や他国との緊張は集団結束の感情を高める。おそらく、基本的人権のもとに多様な民族・文化・宗教が共存するためにも、このような道徳的感情の理解と制御が必要なることを考えさせてくれる一冊でもある。